

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月12日現在

機関番号：32414

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02145

研究課題名(和文) アジア各国洋風画の比較研究 - 美術地理学的観点より

研究課題名(英文) A Comparative Studies of Asian Westernized Paintings--From the viewpoint of Geometry of Art

研究代表者

小林 頼子 (KOBAYASHI, Yoriko)

目白大学・社会学部・教授

研究者番号：10337636

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)： 今回のアジア各国洋風画比較研究を通じて、西洋とアジアの美術の相互関係が当初はキリスト教の世界拡大に伴って生じたこと、西洋との関係が宮廷とその周辺に限られていた諸国では圧倒的な西洋主題と技法の受容が起きたこと、しかし、キリスト教受容の後退とともに洋風画的要素が忘れ去られていったことを確認した。

一方、日本においては、当初はキリスト教の色濃い洗礼を受けたこと、しかし、鎖国後・禁教後は、非キリスト教主題と西洋画法が一定の浸透を見たこと、その際、指導的西洋画家不在のなかで、独自の融合様式を練り上げたこと、かつ、洋風画の展開が明治以降の西洋文化受容にまでつながっていること等が確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近世アジアにおいて展開した洋風画については、ヨーロッパとアジアの個別の国の間、という切り口では従来も研究が進められてきている。このたびは、それらアジアの個別の国における西洋美術の受容の様態を相互に比較研究することにより、新たに、各国の洋風画事情の特徴をより鮮明に把握できるようになった。「影響」という言葉一つで括るにはあまりに多様なその受容の様態を詳細に観察・分析すると、グローバル時代の文化伝播を、近世のみならず、さらにグローバル化の進んだ現代においても、ヨーロッパ・アジアという大雑把なくくりで考察することの危うさが鮮明となってくる。歴史と価値の多様性に重きを置いた思考が求められている。

研究成果の概要(英文)： It has been confirmed that the mutual artistic relationship between Europe and Asia was firstly caused by the Christian policy of expansion after the counter reformation in Europe. Persia and India, among the Asian countries, where mainly the court and the courtiers had a close contact with Europe, accepted European art seriously, though their interest in it drastically fell back soon after their relationship with Europe became weak. As to Japan, especially after the prohibition of Christianity by the Tokugawa Shogunate, non-Christian subjects and European style of art intrigued only a part of painters outside the court, who produced a unique style unifying the European and Japanese, which would offer a basic knowledge and technique of Western culture and art in the Meiji period.

研究分野：美術史

キーワード：グローバル 比較研究 文化移動 洋風画

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

従来、美術史研究は、一国内/一文化圏内での諸作家、諸作品の様式、図像選択、相互影響の検討を通じて、当該作家 / 当該作品の特性を明らかにするとともに、彼らが活動する国/文化圏、それら作品が制作された国/文化圏の内部での文化的特性の把握に努めてきた。人の移動の少ない時代には、作家は、己の民族に固有の土地に暮らし、固有の伝統の中で作品を生み出してきており、その方法には高い妥当性が確かに認められる。しかし、一たび、人と物 / 文化が固有の文化圏を遠く離れ、海を渡り、かつて出会う機会さえなかった土地へと頻りに移動する時代が現実となるや、上述の様式も図像選択も相互影響も一国内/一文化圏内で完結することはほとんどなくなってくる。グローバル化の進展する現時点において、このことは何よりも強く意識されるべき学的立脚点の一つとなる。

Thom. D. Kaufmann（プリンストン大学）は、こうした問題意識を踏まえ、美術地理学という方法論にあらためて注目し、国境や固有の文化圏を超えた美術史研究の必要性を訴えた(*Toward a Geography of Art*, London, 2004)。Kaufmann と問題意識を共有する学術書は、ポスト・コロニアル研究の進展と相まって、近年数多く刊行されている——例えば A. Jackson et al., *Encounters. The Meeting of Asia and Europe 1500-1800*, London, 2004（展覧会図録）；K. Zandvliet et al., *The Dutch Encounter with Asia 1600-1950*, Zwolle, 2002-03（展覧会図録）が、ほとんどの場合、一つの国/文化圏から他の一つの国/文化圏への文化移動が個別に語られるにとどまり、移動がもたらす結果の相互比較研究はされないまま終わっている。本研究に携わる小林が寄稿した論集、D. Leibson et al., *Seeing Across Cultures* (London, 2012) でも状況は同じで、この面での研究はなお手つかずの状態にある。移動の結果の諸国間における相互比較こそが、文化移動を通じて明確化する文化の固有性と変容可能性という、美術史の根幹の一つに大きく関わるだけに残念な状況である。

2. 研究の目的

本研究の狙いは、16-19 世紀に東インド会社経由で移動した西洋画（＝西洋絵画、版画）・画家を把握し、それに対するアジア諸国の反応を比較・検討し、文化の固有性と変容可能性がせめぎ合うグローバル時代の文化伝播の様相を明らかにすることにある。具体的には、

①いかなる西洋画・西洋画家がアジア地域に移動し、

②それらとの邂逅を通じてアジア地域の伝統的絵画様式・主題がいかなる変容を遂げたかを精査し、

③その結果をアジア諸国間で比較・検討・分析し、グローバル時代の文化形成の在り方を探り、

その成果を以って、現在、注目の文化交流史の方法論の一つ、Th.D.Kaufmann（プリンストン大学）提唱の美術地理学に寄与したいと考えた。

3. 研究の方法

アジア各国における洋風画の比較分析を行った研究は、少数の例外を除いて、まだない。G.A.Bailey, *Art on the Jesuit Missions in Asia and Latin America*, London, 1999などの先駆的な著書上梓されているが、あくまで日本/中国/インド/ラテン・アメリカにおけるキリスト教美術の影響に議論が絞られている。

そこで、本研究では日本、ペルシャ、インド、中国に渡った西洋画、そこで制作された洋風画（インドネシアはオランダ東インド会社の拠点があった国だが、見るべき洋風画が

ないので除外)の実態を資史料と現存作品の両面で調査し、画像付きのデータ・ベースを構築し、比較研究をする。なお、これまでに本研究の実行者である小林は、日本洋風画について基本調査を終えているので、その面における調査は、本研究では、補足的なものにとどめた。

具体的には、ロンドンのヴィクトリア&アルバート美術館、大英図書館、大英博物館、ハーグの国立図書館、国立美術研究所、アムステルダム国立美術館、パリのルーブル美術館、ルフト・コレクション、ギメ美術館、マドリードのアジア美術館、ニューヨークのメトロポリタン美術館、モーガン・ライブラリー、クリーブランド美術館、ボストンのハーヴァード大学美術館、ペテルスブルクの東洋写本研究所ほかでの関連作品熟覧・資史料調査を基本とし、その成果に基づき、比較研究を進めた。

また、アジア各国洋風画の研究者——オランダ在住のフリー美術史研究者の Gary Schwartz、Universität Greifswald (ドイツ) の Michael North 教授、New York University (当時) の M.M.Mochizuki など——との意見交換に努めた。さらに、関連テーマをコンセプトとするカンファレンス *The Nomadic Object: Early Modern Religious Art in Global Contact* (2016年1月18日、於ニューヨーク大学アブ・ダビ校) に参加、発表し (*Jan and Casper Luyken's Het Menselyke Bedryf and Shiba Kōkan's Creative Misunderstandings*)、広く知見を交換した。

4. 研究成果

今回のアジア各国洋風画比較研究を通じて、

- ①西洋とアジアの美術の相互関係が当初はキリスト教の世界拡大に伴って生じたこと、
- ②西洋との関係が宮廷とその周辺に限られていた諸国では圧倒的な西洋主題と技法の受容が起きたこと、
- ③しかし、キリスト教受容の後退とともに洋風画的要素が忘れ去られていったことを確認した。

一方、日本においては、

- ④当初はキリスト教の色濃い洗礼を受けたこと、
- ⑤しかし、鎖国後・禁教後は、非キリスト教主題と西洋画法が一定の浸透を見たこと、
- ⑥その際、指導的西洋画家不在のなかで、独自の融合様式を練り上げたこと、
- ⑦かつ、洋風画の展開が明治以降の西洋文化受容にまでつながっていること

等が確認できた。

この研究の社会的意義は、以下のようにまとめられる。

近世アジアにおいて展開した洋風画については、ヨーロッパとアジアの個別の国の間、という切り口では従来も研究が進められてきている。このたびは、それらアジアの個別の国における西洋美術の受容の様態を相互に比較研究することにより、新たに、各国の洋風画事情の特徴をより鮮明に把握できるようになった。「影響」という言葉一つで括るにはあまりに多様なその受容の様態を詳細に観察・分析すると、グローバル時代の文化伝播を、近世のみならず、さらにグローバル化の進んだ現代においても、ヨーロッパ・アジアという大雑把なくくりで考察することの危うさが鮮明となってくる。歴史と価値の多様性に重きを置いた思考が求められている。

なお、自身の研究成果は以下の5の著作物等で発表した。前出の North 教授には、2018

年夏の来日の折に関連テーマで講演をしていただき（於：東洋文庫、演題：*Mediating European Art through Company Channels*）、本研究主題の意義の他研究者との共有に努めた。また North 教授と、これまた前出の Mochizuki 教授には、関連論考を翻訳・公刊にご理解をいただき、小林の本研究の方向性の意義の明確化と周知の一助とさせていただく同意を得た（ミヒヤエル・ノルト「西洋美術の伝播と東インド会社が果たした仲介的役割」；望月みや「つながる世界——世界、世俗世界、超世俗世界」、ともに『移ろう形象と越境する芸術』[八坂書房、2019]中の pp.91-114、pp.13-52 に掲載）。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 2 件)

- ①「東西美術の邂逅と変容—フェルメールを起点に—」（招待講演）、公益財団法人鹿島美術財団秋季美術講演会『グローバル時代の東西』、於鹿島建設講演会室、2018年10月
- ② *Jan and Caspar Luyken's Het Menselyke Bedryf and Shiba Kokan's Creative Misunderstanding*, in Conference: *The Nomadic Object: Early Modern Religious Art in Global Contact* (招待講演)、於ニューヨーク大学アブダビ校《アラブ首長国連邦》、2016年01月18日

[図書] (計 7 件)

- ①高階秀爾ほか監修、根立研介ほか2人著『グローバル時代の東西』鹿島美術財団、2019年9月刊行予定（全ページ数不明；小林頼子担当[頁数不明]「東西美術の邂逅と変容—フェルメールを起点に—」）
- ②青野純子ほか監修、望月みやほか16人著『移ろう形象と越境する芸術』八坂書房、2019（全472頁；小林頼子担当53—90頁：「文化的事物のメタモルフォーシス—近世グローバル時代の美術の往来」）
- ③『フェルメール 作品と生涯』、KADOKAWA、2018（全254頁）、小林頼子
- ④『フェルメール全作品集 スタンダードエディション』、小学館、2018（全250頁）、小林頼子
- ⑤柿田秀樹、若森栄樹編著、松本健太郎他11人著『〈見える〉を問い直す』彩流社、2017（全289頁；小林頼子担当145-162頁：「土地に刻まれた物語—17世紀オランダ風景画に見えるもの」）
- ⑥Ch.Göttler & M.M.Mochizuki編著、D-M.Treece, T.Wedding, W.S.Melon, J.F.Patterson, 他14人著、*The Nomadic Object. The Challenge of World for Early Modern Religious Art*, Leiden, 2017（全613頁；小林頼子担当215-240頁：*The Value of Misunderstanding in Cultural Exchange: The Transfer of Christian Prints from the West to Japan*）
- ⑦『グローバル時代の夜明け—日欧文化の出会い・交錯とその残照 一五四一〜一八五三』（望月みや）との共著、晃洋書房、2017（全281頁；小林頼子担当8-22頁「エピローグ」、54-121頁「東西の空間表象—単一の視点、複数の視点」「異文化のリ・メデイエーション—出島のオランダ人と江戸の洋風画家たち」、122-151頁[共同執筆]「幾何学的遠近法への違和感、あるいは聖ルチアの眼」、212-243頁「文化的密航者の返信—江戸の洋風画家たちと旅する西洋宗教版画」）

[産業財産権]

○出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。